



名古屋柳城短期大学

# ちやべるにゅーす

第22号

2012年7月20日

夏の楽しみには色々ありますが、中でもキャンプと海水浴は、大きな魅力です。忙しい皆さんも時間を見つけて楽しんでください。私も7月末に行われるキャンプの企画に加わっています。

キャンプが行われるのは新潟県長岡市の山側、山古志です。このキャンプは先に合同礼拝で震災について話して下さった松本普さんが中越地震の後から山古志の子どもたちのために毎年行っているキャンプですが、今年がこれが特別な企画になりました。というのも今回は山古志の子どもたちと一緒に福島県から招待した子どもたちもキャンプをすることになったからです。

山古志は、地震によって大きく地形が変わって住む場所を変えたお宅もありますし、

仕事を再開するまでには大変な苦勞をされ、そうした中で生まれたキャンプは子どもたちにとって、大きな楽しみになりました。子どもたちは、地震の後しばらくは長岡の教会の近所にて、教会が以前行っていた保育園の建物を利用して遊んでいたというつながりから子どもたちが山古志に帰ってからも毎年行ってきたキャンプです。

一方の福島県の子どもたちは、原発事故による放射能の影響により外で思いっきり遊ぶことのできない地域の子どもたちです。福島県の放射能汚染については事故から時間がたつにつれて報道される機会は極端に減っていますが、それは、放射能が少なくなったり汚染が除去されたからではありません。実際に

は毎日の生活で様々な不便や困難を抱えて生活しているのです。夏のキャンプは、そうした子どもたちに少しの間でも自由にのびのびと過ごせる環境を用意して上げようということです。自分たちも地震を経験して、その大変さを知っている山古志の子どもたちは、きっと良い友達になってくれるでしょう。

山古志は、長岡の町から1時間近く山に入った農業が主体の地域です。錦鯉の産地として、また闘牛が行われることで有名な所です。

キャンプの1日目は両方のお友達が初めて出会う日です。キャンプファイヤーを囲みながら様々なゲームをして次第に仲良くなっていくでしょう。火が消えた後の夜空には、都会では見られない満点

の星空が広がっています。

2日目には海水浴に行きます。これは、毎年のことですが、山に囲まれて育った山古志の子どもたちにとっては海で遊べるのが何よりの楽しみなのです。思いっきり泳いだ後は、スイカ割り大会の楽しみがあります。この後も色々あって3日間を過ごします。最後には、福島県の子どもたちにも地形が大きく変わって未だに地震の跡が残っている山古志の地域を見てもらいます。困難な現実を乗り越える力もどこかで育ってほしいという願いからです。

福島県の子ども達が伸び伸びと楽しみ、新しいお友達ができたらいいなと思っています。

## 夏 休 み

チャプレン 田中 誠

## 合同礼拝報告

### 「東日本大震災の被害状況と復興支援活動について」

松本 普さん

平成24年6月13日、本学の合同礼拝で、「東日本大震災の被害状況と復興支援活動について」、松本普氏を招きお話を聞くことができました。お話の中では、震災の被害状況を写真として可視化していただいたため、これまで、メディアの情報でしか得られなかった知識に加えて、具現化された知識を獲得でき、さらに、「今、私たちにできること」について考えさせられる内容でした。



松本普氏

スライドに映し出されるリアルな情報の中には、被災地での悲しみや辛さだけでなく、残された人々が命の大切さを噛み締めながら「笑顔」を絶やさず、希望の火を燃やし続けている姿を見ることができました。また、ふじ幼稚園の諸先生方の壮絶な心の戦いについても聞くことができました。特に、「救えた命」と「救えなかった命」についてのお話は、これから保育者の道を歩もうとする学生にとって、「もし、私がお話の場にいたら先生方のように動けるだろうか？ また、私が保育者であったら何ができるのだろうか？」という思考をもたらすよい機会になったと思います。



ふじ幼稚園の先生方

本学の学生も写真を食い入るように見つめ、松本普氏のお話を聞いておりました。今回のお話についての学生の感想を少し紹介いたします。

学籍番号：24B35

氏名：早瀬 紋加

東日本大震災の話聞いてあれからもう1年以上も経っているのかと思いました。そして、ボランティアの写真などを見て、まだ、復興ができていないことを知り驚きました。写真でもそうでしたがそのような話からもあの地震がどれだけ大きくひどいものだったということが感じられました。私は、実際に支援などに関わっておらず、地震に対して準備をしていません。愛知県も太平洋側なので津波の影響が大きいと思います。幼稚園・保育所にいる子どもたちだけでなく、待機児童が多い、この現状で地震が起きたとき、少しでも何か私にできることはないかと考えるよい機会でした。

学籍番号：24C14

氏名：木村 実磨

震災から1年以上経ち、1年前と比べると、支援や復興などを忘れかけていたけれど、あの写真を見て、また色々と思い出しました。ふじ幼稚園の先生方が頭をたれている様子の写真がありましたが、亡くなった先生や助けられなかった園児への無念の思いや悲しみがリアルに伝わってきて、胸が痛くなりました。その中でも先生方も被災したのに救えなかった子どもの両親に「なぜ、私の子どもは救えなかったのか？」と意見を求められた時の先生方もとても、死にたくなるくらい悲しみや悔やみがあったと思います。それでも、前を向き、再び、幼稚園を再開した心と人々への温かい奉仕の心に胸をうたれました。私もそんな保育者になりたい。

以上のように学生もそして、教職員も大変、心が動かされるお話を聞くことができました。とても良い機会を与えてくださいました松本普氏に感謝致します。（報告：水落洋志）



### 前期の礼拝から（1）

5月9日（水）後藤真利さん  
『NPO法人沙漠緑化ナゴヤの活動について』

去る5月9日（水）の礼拝の時間に、NPO法人・沙漠緑化ナゴヤの方々をお招きして、お話を聴く機会をもった。毎年、非常な勢いで沙漠化していく中国にあって、十数年にわたり植樹活動を続けて来られたグループであり、その活動にはとても敬服に値するところがある。しかもそれだけでなく、中国で一緒に活動した現地の子どもたちを名古屋に招待して交流を深めている、まさに明日の命へとつながる活動をされていることに大きな意味を見出すのである。



本日は、沙漠緑化ナゴヤの活動について、お話しする機会をいただきありがとうございます。このようにたくさんの若いお嬢さんがたの前でお話をするというので、私自身大変あがってしまい、お聴き苦しい点があるかと思いますが宜しくお願い致します。

私どもの『沙漠緑化ナゴヤ』は、1998年から、内モンゴル自治区の沙漠で3年間植樹活動を行い、2001年からはチベット高原に近い、甘肅省劉家峽と青海省西寧市郊外で植樹活動をしてきました。

中国の国土は日本の国土の何倍もあります  
が、その52パーセントは砂礫地といわれてお  
ります。実際に現地に行ってみますと、赤土  
がむき出しになった山々がどこまでも連なっ  
ており、日本のように緑豊かな山は見るこ  
とができません。これらの山は保水機能がなく、  
雨水は一拳に流れ落ちてしまいます。

毎年春になると中国の奥地から黄砂が偏西  
風に乗って日本にきますが、私どもの会は、  
その黄砂が飛んでくる元へ行って植樹をして  
きました。今から10年ほど前に、初めて植樹  
を開始したときは、はるばる遠い日本から植  
樹に来てくれたというので、盛大な歓迎式典  
が行われたほどでした。

植樹は、日本では当たり前のように行われ  
てきましたが、中国ではほとんど行われてお  
らず、草地があればヤギやヒツジ、ヤクなど  
の放牧地として利用し、家畜の餌として草や  
苗木は食べつくし、木は燃料として燃やして  
しまったようです。そんな中で、私どもが植  
樹した所はなんとか根付いて緑が少しずつ広  
がっていきました。

広大な中国で、少しばかり植樹してみても  
どうなるものでもありませんが、私どもの植  
樹活動が中国でテレビ放映され、一つのモデ  
ルケースとなり、今日では国をはじめ地方組  
織や住民が植樹に取り組むようになり、年ご  
とに緑化が進むようになりました。

植樹した木々が活着するとどうなるか。そ  
れらの木々は防風林の役目を果たし、木々の  
もとには下草が生えてきます。そこには昆虫  
などが増え、今度はそれらの昆虫を食べる鳥  
や小動物が生息するようになります。やがて  
林の周辺では農業も出来るようになりました。

今年も、6月に緑の協力隊を結成して現地  
に行きますが、年ごとに街々の街路樹も大き

く育ち、植樹した山々に緑が確実に増えてい  
く風景に感動を覚えます。

私どもの活動の特徴を少し述べさせていた  
だきます。それは、私どもが日本から行って  
勝手に植樹しているというのではなく、現地  
の小学生や先生方と一緒に植樹するという点  
に大きな特徴があると思います。植樹を行っ  
た夕べには、ホテルに小学生や先生、保護者  
を招いて交流晩さん会を催し、一層の親睦を  
深めます。また、2006年からは、毎年、現地  
の小学生数名と先生を名古屋の地に招待し、  
会員宅にホームステイしてもらいながら名古  
屋市を表敬訪問し、また名古屋市内の小学校  
を訪問して交流を行っております。

日本と中国の間には、時にいろんな問題も  
起きますが、これらの小学生たちが私どもの  
架けたささやかな金の橋を渡り、やがて日中  
親善に尽くす人材に育ってくれることと思  
います。

### 前期の礼拝から (2)

6月27日 (水) 古橋よしえさん  
「共に生き、共に学ぶ」

6月27日 (水) の礼拝では、かつて柳城に  
社会人入学をし、現在はNPO法人の「ひだま  
りの里」で働いている古橋よしえさんのお話  
をうかがう機会をもった。



私が社会人入学をしたとき46歳でした。なぜこの年齢で保育の勉強をしようと思ったかと申しますと、私にはダウン症という障害を持つ娘がいたからです。娘は生後2年間の間に2回の心臓手術をしました。心臓病に伴う不全の発作で入退院を繰り返し、2年間をほとんど病院で過ごしました。娘には5歳違いの兄がいますが、一人っ子ではさみしく、いつも道端のお地藏様に手を合わせて僕に元気な弟を7人くださいとお願いしていました。でも願いはかなわず元気な弟ではなく、顔も見ないうちに母と共に病院暮らしを始めた妹のことを喜ぶには、兄は幼すぎました。ある日、息子が私に訴えました。「お母さん！もう絶対に赤ちゃんを産まないでね。さみしかったんだよ、悲しかったんだよ。ぼくは元気な弟がほしかったのに、女の子なんか生んじゃってさ、しかも病気でさー、いやだ、いやだ、絶対にいやだ」としがみついて、大泣きをしました。そのときの私はごめんね、ごめんね、とただただわが子を抱きしめ、一緒に泣く以外になぐさめる言葉がありませんでした。

私が本校へ入学した時、娘は小学校4年生でした。いつまで経ってもNHKの「お母さんといっしょ」を見て喜ぶ幼い心を持っている娘を見ているうちに、保育の勉強をしてみたい、娘のために今からでも間に合うかもしれないと思い立ち、受験勉強をして本学に入りました。

礼拝の時間は、家事、育児、学生と3つのわらじを履き、目が回る忙しさの中で、唯一冷静に自分と向き合える貴重なひと時となりました。そしてイエス様の教えに触れ、これまでは自分や家族のためにしか祈ることができなかつた私でしたが、他の人のためにも祈

ることができるようになりました。

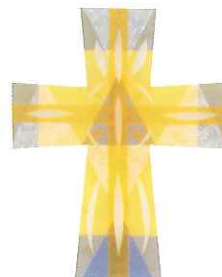
学外活動として、私は入学前から障害をもつ子どもたちの卒業後の行き先づくりに関わっていました。勉強会をしたり、バザーをしたりして施設づくりを目指していました。4年間の準備期間を経て共同作業所ひだまりの里を設立しました。4年前にはNPO法人となり、3年前からは、本校の入学式、ホームカミングデーのお茶とクッキーをご注文いただき、本当にありがたく感謝しています。

娘を授かり27年間で過ぎて今思うことは、障害が分かったときはこの現実がなかなか受け入れられず泣いてばかりでしたが、夫は娘の障害が分かった時点で、娘の障害について役所、保育園、児童センターで情報や文献を取り寄せ、私に伝えてくれました。

神様はその人が乗り越えられないような試練は与えられないこと、娘の両親に私たちを選んでくださったことを話し、2人で力を合わせて育てていこうと言ってくれました。

今、私は娘の親に私たち夫婦を選んでくださった神様に心から感謝しています。私たちを応援してくださるたくさんの皆様に感謝しながら、娘を含むたくさんの仲間たちと一緒に地域で共に学び、共に生きていこうと思っています。

最後に、将来保育者として社会に出られる皆さまが本校での学びを大切にされ、素晴らしい仕事をされますことをお祈りさせていただきます。本日は有難うございました。



## 新任教員自己紹介

新任の教職員方をそっくりな似顔絵と共に紹介します。似顔絵は保育科2年の村上ひかるさんに描いていただきました。



こじま ちえこ  
**小島千恵子 先生**

新任ですが、おなじみというのか、「ずーっと前からいる」教員と思われている小島です。

私は、2009年から非常勤講師として毎週水曜日に2コマ授業を担当していました。専任となって新たな気持ちで皆さんとともに歩こうと思っています。毎週水曜日の礼拝の日に授業があったわけですが、チャペルに足を向けることはありませんでした。今はこの時間が私にとって大変有意義で貴重な時間になっています。40分間しっかり自分と向き合うことができる時間です。生きることに向き合っているという実感があります。これは、保育の根源でもあります。皆さんも毎週40分間、私と一緒に自分と向き合い、保育の根っこを探ってみませんか。



の だ  
**野田さとみ 先生**

本年度より本学教員として、幼児の体育・保育内容指導法表現などを担当させていただいております。私もかつてミッションスクールで2年間学んだ経験があり、キャンパスの隣に教会がある環境はとても懐かしく感じます。その2年間からはたくさんの出会いをいただきました。そして教員として仕事をする立場になった現在、その時代の学びが自分の考え方に影響していると気付かされることが多くあります。本学で学ぶ学生たちも、きっと何年か後にここで学びに気付くことがあるのだろうと、礼拝に参加させていただく度に思います。そんなことを考えつつ、日々の課題に向かっていきます。



みずおち ひろし  
**水落 洋志 先生**

4月からお世話になっていきます水落です。皆さんが日本一の保育者そして、日本一の父母になれるような専門的知識と技能を本学で学べるよう微力ながらサポートできればと思っております。さて、柳城に来て皆さんの第一印象は「爆発力」です。何かやると決めた時の皆さんの顔は眩しいぐらい輝いています。その爆発力をさらに拡大させつつ、本学で自分を輝かせる力をいっぱい養って下さい。私も皆さんと共に成長できるように何事にも価値を見出し、今いる自分にさらに負荷をかけ目標を達成できるように努力していきたいと思います。これから宜しくお願いします。いつでも気軽に声をかけて下さい。



やまわき まゆみ  
**山脇 眞弓 先生**

着任した日の入学式で、この柳城短期大学の創設者であるヤング先生が抱かれた保育者養成の思いと経緯を、新海学長先生の挨拶の中で聞きました。「愛をもって仕える保育者の育成」、「品格のある人格の形成」「人々のためになる保育士、人々に頼られる介護士の育成」など、大学教育の中に大きな柱があることを痛感しました。このように、大学教育が免許を取るためだけの目的で学びが展開されているのではなく、人間形成を主軸に置いていることを知り、私はこの大学で仕事ができてよかったと思っています。

私は、授業の第1回目に学生へ「大学では教育を受けるということと、自ら学びを深めていくという二つの学び方がある。『自ら』ということが意味するものは何か。よく考えて行動してほしい」と伝えてきました。

学生がこの大学に在学する2年間、機会あるごとに「学びを深めることが、自己を成長に導く」と言い続けていきたいと思っています。

2012年7月20日発行 第22号

発行所 名古屋柳城短期大学

名古屋市昭和区明月町2-54

編集兼  
発行者

名古屋柳城短期大学 宗教委員会

印刷所

株式会社 マルワ